

児童が道徳的価値について深く考える授業を目指して

－ 発問の質や構成の工夫を通して －

登米市立新田小学校 佐藤 千恵

1 目指す授業像

- (1) 児童が他者と道徳的価値に対して意見を交流することで、多面的・多角的に考えを広げられる授業
- (2) 児童が道徳的価値を自分との関わりで捉え、深く考えられる授業

2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

道徳の教科化に当たっては、従来の「読み物資料中心の道徳」から「考え、議論する道徳」への転換が強く求められている。そのためには、ねらいとする道徳的価値について、児童一人一人が「深く考える」ことができるような発問や発問構成を工夫する必要がある。

しかし、これまでの自分の発問を振り返ると、資料の時系列に沿って、場面の状況把握や登場人物の心情を問う発問が多く、ねらいとする道徳的価値について深く考える発問になっていないという課題があった。

この課題を踏まえ、次の3点を意識して授業実践に取り組むこととした。

- (1) 児童が、道徳的価値について多面的・多角的に思考を広げられるような発問の質の工夫
- (2) 児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の質の工夫
- (3) 児童が、自己の生き方について考えを深められるような発問構成の工夫

本校中学年部の重点内容項目は、「A-(5)希望と勇気、努力と強い意志」である。この内容項目について扱った2つの教材文を取り上げて授業実践を行う。

3 I期の取組について 【主題名「目標に向かって努力する」教材名「一りん車にのれた」】

(東京書籍 あたらしい道徳3)

(1) 研修テーマに迫るための手立てと具体的な取組

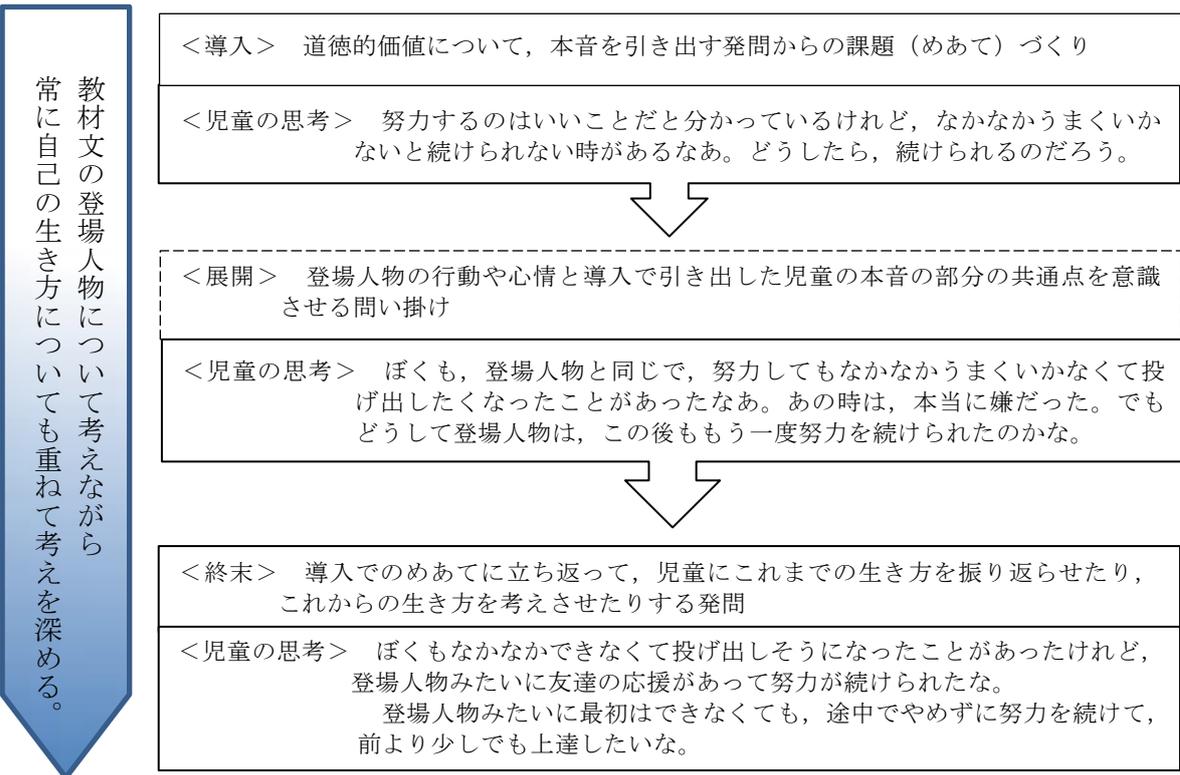
本主題において、「深く考える」とは、「努力・強い意志」について、教師の発問に対して考えたり、友達の考えを聞いたりしながら多面的・多角的に思考を広げ、自分との関わりで考えることを通して、自己の生き方について考えを深めることと捉えた。

学級の実態として、一つの目標に向かって地道に努力する児童がいる一方で、失敗しないのできそうな目標を選んで立てたり、少し困難が生じると途中であきらめてしまったりといった「失敗を避けようとする児童」の姿も見られる。そこでI期では、「目標を達成できたか、できなかったか」という結果だけでなく、「なかなかうまくいなくても、今できることを精一杯努力し続ける過程の大切さ」について気付かせたいと考えた。

具体的な取組として、下記の工夫を行った。

- ① 児童が、道徳的価値について多面的・多角的に思考を広げられるような発問の質の工夫
  - ア 「気付かせたいこと」と「考えさせたいこと」を明確にして発問を吟味する。
  - イ 児童の多様な見方や考え方が表れるような発問を吟味する。
- ② 児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の質の工夫
  - ア 導入で、道徳的価値について自分との関わりで課題意識を持たせる発問を行う。
  - イ 終末で、道徳的価値について新しく気付いたことやこれからの自分の生活に生かしたいことを問い、実生活につなげて考えられるようにする。
- ③ 児童が、自己の生き方について考えを深められるような発問構成の工夫

以下のような発問相互の関連付けを図った発問構成を考え、児童の思考を深めていく。



(2) 成果と課題 (○成果, ▲課題)

① 児童が、道徳的価値について多面的・多角的に思考を広げられるような発問の質の工夫

○ ねらいとする道徳的価値に対して、多面的・多角的に思考を広げるためには、「気付かせたいこと」と「考えさせたいこと」を明確にして発問をし、その中で多様な意見を引き出すことが、とても有効であった。

I期の授業で気付かせたいことは、「困難な状況でも今できることを精一杯努力し続ける過程の大切さ」である。そこで、そのために努力の過程でなかなかうまくいわずに嫌になってしまった主人公が再び努力をするようになった場面に着眼させて考える発問を中心発問とした。この発問を通して、なかなかうまくいかない困難な状況（努力の一過程）の中での努力の捉えや、努力の源について多様な意見を引き出すことができたと考える。

○ そして、その後の補助発問で「一か月後メリーゴーラウンドができなかった時『わたし』はどのような気持ちになったでしょうか」と、教材文の先のことについて考えさせた。教材文には直接書かれていない部分であるからこそ児童の多様な見方や価値観が引き出せると考えた。「1か月後」という時期と「できなかった時」という想定する主人公の状況を明確に示したことにより、ねらいとする道徳的価値に関しての多様な考えを引き出すことができたと考える。

○ 終末で書いた振り返りのノートの記述を見ると、全体の35%の児童が「努力」に関して多面的・多角的に捉え、今までの自分の考えにない新しい気付きを持つことができていた。さらにその記述の内容を見ると、「その時失敗しても頑張っていればまた次がある」という「努力」の捉え方が広がっている記述が23%あった。さらに、「自分の目標やモデルになる人物を見付けると頑張れる」「友達の励ましで、できなかったことができるようになる」という努力の源についての気付きの記述が12%あった。

▲ 「気付かせたいこと」と「考えさせたいこと」を意識して、児童の発言一つ一つにち密に問い返し過ぎると、広げるつもりが一つのゴールに向かって誘導することにつながってしまう。児童がお互いに多様な意見を交流し合い視覚化していく中で、自ら新しい気付きを持つことができるようにする必要がある。

- ② 児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の質の工夫
- 導入で、「努力をするのはいいことだけれど続けていくのは大変だ」という本音の部分共有し、そこから課題意識を持たせる発問につなげることができた。そのため、展開の中で登場人物の心情やその後の行動について考える時、常に自分の経験とつなげることができたと考えられる。
  - 終末に書いた本時の振り返りの記述を見ると、学級全体の69%の児童が「努力」に関して実生活につなげて考えることができていた。さらにその記述の内容を詳しく見ると、「自分も主人公のように周囲の友達や先生に励まされたことで頑張れたことがある」「自分も主人公のようになかなかできなくて苦しかったことがあったけれど、頑張って練習してできるようになったことがある」といった自分の生活経験を想起し、主人公と自分を重ねて価値理解を深めた記述が54%あった。また「友達がなかなかできなくて苦しんでいる時があったら、自分も友達を励ましたい」「(勉強やピアノ、一輪車、うんていなど)自分も主人公のように最後まで頑張りたい」と、今後の自分の生活に生かしていこうとする意欲を高めた記述も46%あった。
- 授業の時間内に振り返りを記述しきれなかったAさんは、授業後に担任のところへ自分の経験を話しに来た。「先生、わたしも一輪車に乗れなくて嫌になった時、〇〇ちゃんに教えてもらってできるようになったよ。頑張ってできるようになったら、すごくうれしかったよ」Aさんは、書くことが苦手な児童である。しかし、その言葉や表情から、自分の経験を想起させて「努力を続けることのよさ」について考えていたことが見てとれた。
- ▲ 本時は、場面把握に時間を掛け過ぎ、お互いの振り返りを共有する時間が十分になかった。自分の生活に生かしたいと思うことを書いた児童の記述を授業時間内にもっと伝え合うことができれば、更に他の児童にも「自分との関わりで捉えよう」とする考え方が広がっていったのではないかと考える。
- ③ 児童が、自己の生き方について考えを深められるような発問構成の工夫
- ②の成果でも触れたように、終末の児童のノートの記述や授業後の児童の様子から、授業で教材文の主人公の生き方について考えながらも、自分自身のこれまでの生き方を見詰めて考えを深めている児童が多かった。その理由としては、導入、展開、終末と3つの段階全てに、常に一貫して「努力っていいことだと分かっているけど、(やろうとしていることが)頑張ってもなかなかできないと続けるのが嫌になってしまう」という主人公と自分たちの共通部分を意識させるような問い掛けを行ったことが挙げられる。そこで、児童が漠然と「努力」について考えるのではなく、「頑張ってもなかなかできない状況」における「努力」について焦点化して考えられたことが、本時のねらいに沿った思考の深まりにつながったと考える。

#### 4 II期の取組について

【主題名「目標に向かって強い心でやり抜こうとする」教材名「まけるものか」】  
(東京書籍 あたらしい道徳3)

##### (1) 研修テーマに迫るための手立てと具体的な取組

本主題において「深く考える」とは、I期同様に「努力・強い意志」について、教師の発問に対して考えたり、友達の考えを聞いたりしながら多面的・多角的に思考を広げ、自分との関わりで考えることを通して、自己の生き方について考えを深めることと捉えた。

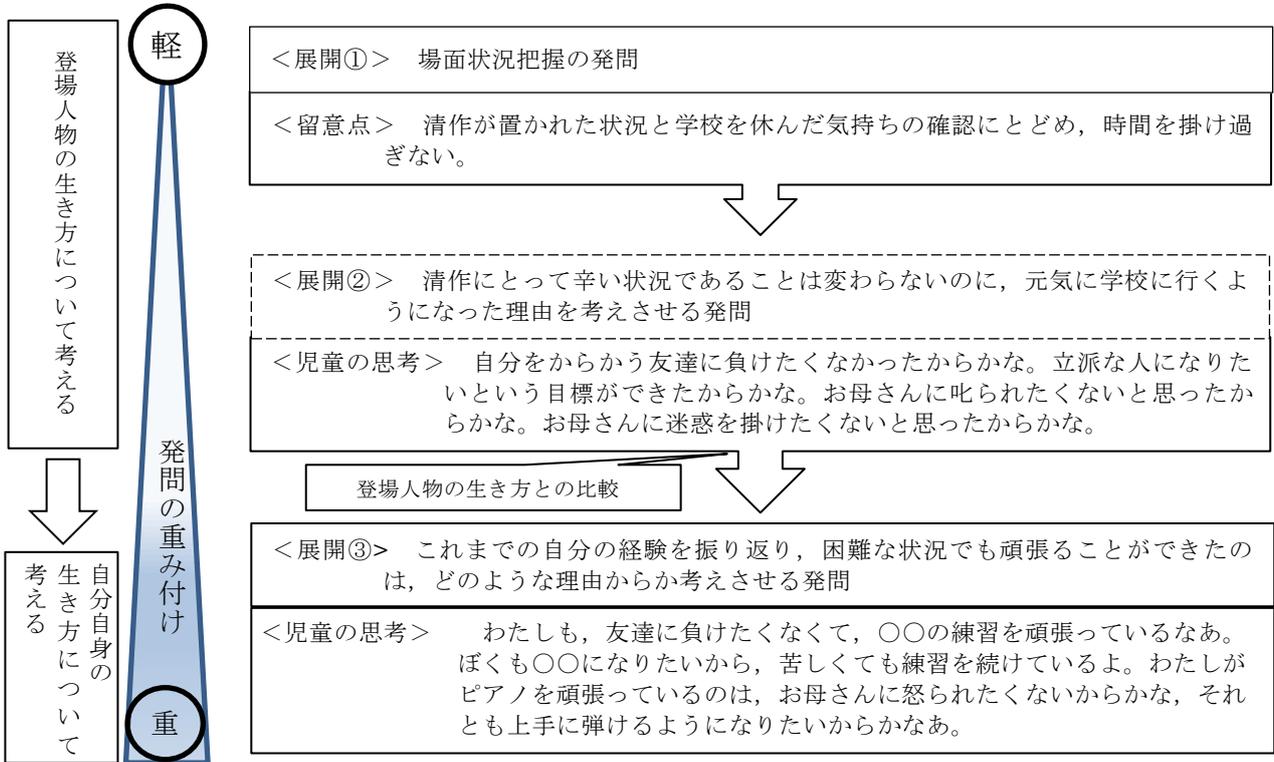
2学期も後半に入り、児童の「漢字練習」や「音読練習」「リコーダー練習」といった課題に取り組む姿を見ていると、目標(なりたい自分)に向かって自主的に頑張る児童がいる一方で、親や教師に言われるから仕方なく頑張る児童の姿が見られた。これは、なりたい自分が見えていないことや「目標」が「自分の目標」になっていないことが原因と考えられる。

こうした学級の実態を踏まえ、II期では、「なぜ努力をするのか」という動機について、展開部分の中で教材文の登場人物のことだけでなく、自分自身にもっと深く目を向けさせたいと考えた。

「努力する」という行動は同じであっても、その行動の動機が「努力しないと怒られる」という他律的なものとするならば、辛い状況の中でやり抜くことは難しい。しかしそれに対して、「なりたいたい自分になるために努力したい」という自律的なものであった場合、同じ辛さに対しても感じ方は変わってくるであろうと考え、この「自律的な努力」のよさに気付かせたいと考えた。

具体的な取組として、下記の工夫を行った。

- ① 児童が、道徳的価値について多面的・多角的に思考を広げられるような発問の質の工夫
  - ア 「考えさせたいこと」を明確にして、発問や補助発問としての問い返しを更に精選する。
  - イ 中心発問の後のペアや全体での話し合いにおいて、比較の視点を与えることで、多面的・多角的に思考を広げられるようにする。
- ② 児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の質の工夫
  - ア 導入で、道徳的価値について自分との関わりで課題意識を持たせる発問を行う。
  - イ 終末で、道徳的価値について新しく気付いたことや、これからの自分の生活に生かしたいことを問い、実生活につなげて考えられるようにする。
- ③ 児童が、自己の生き方について考えを深められるような発問構成の工夫
  - 以下のような発問構成を考え、自分自身の生き方について考える発問をより重く扱うことができるように発問の重み付けをしながら児童の思考を深めていく。



(2) 成果と課題 (○成果, ▲課題)

- ① 児童が、道徳的価値について、多面的・多角的に思考を広げられるような発問の質の工夫
  - 展開②の発問で「清作の努力の理由」を問うた時に児童から出た意見を板書でカテゴリー分けし、それと比較させながら「自分の努力の理由」を振り返らせたことで、より多面的・多角的な考えを引き出すことができたと考え (図1)。
  - 一つの答えに誘導しないように意識して問い返しを吟味した。このことにより、児童は「努力をするにはいろいろな理由があるのだけ



図1 授業実践Ⅱの板書

れど、その中でも自分はこのような理由でやっていることが多いかな」と普段の自分の行動を素直に振り返って、自覚することができた。一人一人の道徳性は、それぞれ形成のされ方が異なる。そのことを教師が自覚した上で表1のような問い返しをしていくことが、児童の本音を引き出し、多面的・多角的に思考を広げることにつながったと考える。

表1 授業実践で有効であった問い返し

| 場 面                          | 主な問い返し例   |
|------------------------------|---|
| 本音を出させたい場面                   | ・みんなも〇〇のような時ってないかな？<br>・それは、〇〇と▲▲のどちらですか？               |
| 詳しく話を引き出したい場面                | ・もっと詳しくお話できる人はいるかな？<br>・つなげて、お話できる人はいるかな？               |
| 考えに偏りがある場面<br>反対の意見を引き出したい場面 | ・他の考えはあるかな？<br>・では、なぜ〇〇したのかな？（視点の提示）<br>・本当は〇〇したくないのでは？ |
| 価値の捉えの間違い                    | ・もっと詳しく聞かせて。<br>・どうして、どう考えたの？                           |

- ② 児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の質の工夫
- 導入で、子供時代の野口英世と自分自身の共通点を押さえたことにより、自分と重ね合わせて課題意識を持って教材文を読むことにつながったと考える。
  - 終末に書いた本時の振り返りの記述を見ると、全体の96%の児童が「努力」に関して実生活につなげて考えることができた。これらの記述は、I期の授業実践と比較すると大幅に増えていた。さらにその記述の内容を詳しく見ると、「自分も辛くて逃げてしまい親に心配や迷惑を掛けたことがある」「自分も夢を持って頑張っていることがある」「自分も友達に負けたくないという気持ちで頑張っていることがある」というように、多くの児童が自分の生活経験を想起し、自分の行動の理由について自覚を深めた記述をした。またさらにそこから、「清作のように、辛いことがあっても頑張るといいことがある。自分も頑張りたい」「自分の夢を実現させるために、これからも頑張りたい」と、今後の自分の生活に生かしていこうとする意欲を高めた記述も全体の62%あった。また、授業の中で「私は、お母さんに怒られたくなくてピアノの練習をしているなあ」と発言した児童もいた。「怒られたくなくて」という他律的な自分の生き方に目を向ける児童がいたことは、大きな成果であった。
- ③ 児童が、自己の生き方について考えを深められるような発問構成の工夫
- ②の成果として前述したように、II期の授業では、自分との関わりで道徳的価値を捉えた児童が多かった。その要因としては<展開②>の発問で引き出された「清作の努力の理由」を基にしながらか、<展開③>で「自分の努力の理由」に視点を変えて発問したことが挙げられる。英世と自分を比較することが、これまでの自分の生き方を深く振り返るきっかけとなったと考える。
  - ▲ 清作（英世の幼名）の気持ちの変化について押さえ、授業の中で他律と自律に目を向けさせたものの、終末の本時の振り返りの記述の中で、「他律と自律の観点」で自己の生き方について考えを深めた児童はいなかった。展開後段や終末で、自分の経験の振り返りをした際に、清作のように「他律と自律の両方を経験した児童の話」等が引き出せたなら、その違いが更に実感を伴ったものになったのではないかと思われる。道徳科では、教師側がねらった答えに誘導しないようにするのが前提である。その上で、「実感を伴って他律と自律の観点で自己の生き方について考えを深める手立て」を検討していく必要がある。
  - ▲ 展開後半や終末で、価値に対して児童が考えを伝え合う時間が十分確保できなかった。これは、どうしても「場面状況」の把握で時間が掛かったことが大きな要因である。発問を投げ掛ける前に、もっと視点を絞ってから発問をする必要があった。

## 5 1年間の総括

### (1) 研修の成果

1年間の研修で、特に「②児童が、自分との関わりで実感を持って道徳的価値を捉えられるような発問の工夫」について、大きく成果があった。I期の授業とII期の授業の児童のワークシート記述から、道徳的価値について自分事として捉える記述をした児童が69%から96%へと大幅に増えた(図2)。実践授業IIで、登場人物の行動の理由をカテゴリー分けしたものを見せながら、自分の行動の理由を問うと、既出の考えと比較して自分の行動を深く見詰めることができた。そのカテゴリーとの共通点や相違点について比較することを通して、これまで何気なく行っていた自分の行動の理由を深く振り返り、自覚することにつながった。

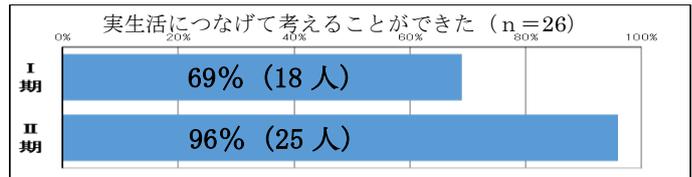


図2 I期とII期の児童のノート記述の比較

- ・ぼくも、お母さんに迷惑を掛けていることがあります。英語の発表練習のことで。お母さんにせりふを教えてもらって練習しています。お母さんに頼らず、自分でできるようにしたいです。
- ・ピアノをやりたくない気持ちがあったけれど、お父さんやお母さんのお金を無駄にしたいくないから、続けました。
- ・わたしは、友達に負けたくなくてスイミングを頑張っています。これからは負けないようにスイミングを頑張りたいです。
- ・ぼくは、毎日素振りをしているけれどドラフトでプロ野球チームに入団したいから、もっと練習を増やしたい。辛くても頑張りたいです。
- ・わたしは妹が二人いて、「なんで自分だけ」と思うことがたくさんあるけれど、気持ちを押しさえようと頑張っています。どうしてかという、「優しい人」になりたいからです。
- ・ぼくも、逃げたい気持ちはあります。お母さんに怒られないように気持ちを切り替えていきたい。

図3 II期の児童のノート記述

この実践にヒントを得て、その後の授業でも黒板の記述で自分の考えに近いものにネームマグネットを貼らせたり、新たに書き込ませたりして、自分の考えを自分の手でカテゴリー分けする試みを行っている。一人一人の児童の考えを視覚化することで、自分のこれまでの生き方を自覚できるだけでなく、教師が個々の児童の考えを見取る有効な手立てとなっている。

### (2) 今後の課題

#### ① 児童の思考を「広げる発問」か「深める発問」かを意識した問い返しと学習形態の吟味

道徳科の授業の中で、児童の発言の全てにち密に問い返しを行っている、児童の思考を広げるつもりが一つのゴールに誘導してしまう。また、45分という限られた時間の中で、児童が自分の生き方について考えを深める時間を十分に取れなくなってしまう。そこで、他者の考えに触れることで、思考を広げる発問と児童の生き方に関する思考を深めるための発問を区別し、それによって学習形態や問い返しを意図的に使い分けた形で授業の学習過程を考えていきたい。

#### ② 多様な意見が出た後に、そこから児童が自ら「よりよい生き方」について考え深められるような問い返しを生み出す板書の吟味

教師は中心価値に関する児童の実態を踏まえ、授業で「気付かせたいこと」と「考えさせたいこと」を設定する。しかし、授業を終えてみると、中心価値そのものについての思考は漠然と広がるが、本時のねらいで意図した「考えさせなかったこと」での思考の深まりにつながらない場合があった。そこで、多様な意見を出し合った後、そこから本時のねらいで意図した「よりよい生き方」についていかに児童自身に気付かせていくかという観点で、多様な意見の比較の視点や板書の整理の仕方(図や比較図等)を更に考えていきたい。

#### 主な参考文献

- |                           |        |      |
|---------------------------|--------|------|
| [1] 加藤宜行：「道徳授業を変える教師の発問力」 | 東洋館出版社 | 2012 |
| [2] 加藤宜行：「深く考える道徳授業」      | 光文書院   | 2015 |
| [3] 明治図書：「道徳教育」(2018年8月号) | 明治図書出版 | 2018 |

#### 図表等の許諾について

図3は、授業実践の中での児童のノート記述の一部である。児童氏名を伏せて掲載することとし、児童本人と保護者から使用許諾を得た。